

式子内親王御詠草（四）

土田龍太郎

たれにてもあれ内親王の家集を披き見ば、夢うたた寢を詠きたまへる御歌の少なからぬに心づかではあるべからず。いかに昔を戀ふるとも時の流れに逆らふてだてのあらばこそあらめ、せめてはかなき夢ぢにまどろむうちに、ただしばばかり去にし世のそのをりに立ち返り、うき身のよそに出でなむほかになぐさむるすべなかるべし。

されば夢といふもの今と昔の仲立ちなりとも見なしつべければ、去にし時をひたぶるに戀ひしたまへる内親王の御詠草に夢を詠ませたまへるが多きはげにさもありぬべきことにていともあやしむにたらず。

夢うたた寢を詠きたまひし内親王の御歌くさぐさあるが中に、まづ目とまりて見ゆるは右に引く七首がほどなるべし。

はかなしや枕定めぬうたたねの

ほのかにかよふ夢のかよひぢ

まちまちて夢かうつつか時鳥

ほどしむす

ただ一聲のあけぼのの空

たのむかなまち見ぬ人を思ひねの

ほのかになるるよひよひの夢

つかのまのやみのうつつもまだ知らず

夢より夢にまどひぬるかな

窗近き竹のはすさぶ風の音に

ね

いとど短きうたたねの夢

千たびうつきぬたの音に夢さめて

もの思ふ袖の露ぞくだくる

内親王の御歌柄さまぎまにてさらに一とほりならざること先に述べたり。御詠にそなはれる長たけの高さ心の深さは御身に生れつきたるものなるにまぎれなければ、御詠草それぞれにつきて、世にありきたれる風體をこれなむそれとあながちにあてころみむはえうなきわざと知るべし。

さはれ御詠草のことにめでたきが中には、幽玄のおもむきのそひたるものここかしこに見ゆめれば、ほかの風體のことはともかくもあれ、内親王の御歌の幽玄につきてせめて一わたり考へみではあるべからず。

そも大和歌につきて幽玄を云ふことはや古き世に生まれりとおぼしくて、古今集眞名序には或興あるは興入幽玄いりゆうげんの一句見えたり。世々の名立たる歌人うたびとの内にて幽玄をことに重くみ尊びしは藤原俊成なれども、式子内親王の歌の師とたのみたまひしこの俊成の導きまゐらするにまかせておのづから幽玄の妙趣をも得たまひけむことげに思ひしのぶにたへたり。

そもこの幽玄といふことの眞義すぐにはしかと定めがたきものにておぼつかなきところ少からねば、今はおのがおしはかりもておほかたのおもむきばかりゆるゆる考へもてゆかむほかすべなきにたり。

ここにたとへば朧月夜の春の花、今をさかりに咲きたらむに、美しくなまめけることただならず、うち見るにもゆゆしければ、わが目のあたりに咲ける花にてはあれど、なかなかこの世のものとも思はれず、夢かうつつかしばし惑はるるほどに、ふと匂ひくるがにそこはかとなくゆかしきけはひのつとそひて、我が魂たまはつねに知られぬたへなるさかひにしばし至りぬるがにおぼゆることあり。かかるとき言の葉もてはいかにとも捉へがたきほかにただよふ餘情よせいのごときものを幽玄と呼び來たれりとせば、おほかたはたがはざらまし。鴨長明の無明抄の中にて、

ただ詞にあらはれぬ餘情、姿に見えぬ景色なり

と云ひて幽玄を説きたるは、同じ心とおぼしくて、ここに餘情といへるもけはひあるなきかそこはかとなき風情なるべし。

ただうち見るからに幽玄の體のおのづから伺はるる内親王の御詠さまざまなるなかに

匂ひをば衣にとめつ梅の花

ゆくへも知らぬ春風の色

といへる一首、心深きことよなし。風に色あるべくもあらねども、ことさらに風の色を云へる下句いともたへなり。近き世に桃青翁の

石山の石より白し秋の風

海暮れて鴨の聲ほのかに白し

てふ發句ありて、風や聲も色あるがに云ひなしたり。空のかなたにあくがれてやまぬはるけき思ひをば、ゆくへもしらぬの七字にこめたまへるわざ、かの西行法師の

風になびく富士の煙の空にきえて

ゆくへも知らぬわが思ひかな

といへる歌にさもにたれど、もし幽玄のかたにつきて思はば、内親王の御詠なほひとときはまされりとや云ふべからむ。ほかに俊成女の詠めりし

梅の花あかぬ色香も昔にて

おなじかたみの春の夜の月

といへる一首、新古今集に入りたれど、内親王の御詠とのまさりをとりはいかにてもあれ、幽玄のおもむきのあひかよひて聞ゆるはいとおもしろしと云はでやはあるべき。

世の人のほめたふとびきたれる内親王の御詠草あまたある中にて、幽玄のかたにとりてすぐれてめでたきは、新古今集夏の部に入りたる左の一首のほかにもとめがたかるべし。

かへりこぬ昔を今と思ひねの

夢の枕にほふ橘

この歌の上の句につきて鈴屋大人の美濃の家づとは

この句は古歌の詞二句を一句につづめてとれるにて、上句、昔を今になすよしもが
なと思ひてねたるよしなり。ともじにてさやうに聞ゆるなり。

と釋きなしたり。鈴屋大人によるに、内親王の上の句の本歌にとりたまひしは、すでに上
に引きし、伊勢物語に見ゆる

古へのしづのをだまきくりかへし

昔を今になすよしもがな

の一首にほかならねど、本歌と見なしつべきはこの一首にしもかぎるべからず。伊勢物語
と古今集に載れる

五月まつ花橘の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

てふ一首のおもむきの下の句にこもれること疑ひなし。

はるけき昔いかに戀ひむともうつつに返りくることわりあるべくもあらねば、せめては
夢ぢばかりに來し方を辿りやせむとまどろみあたるに、をりしも花橘の香のそこはかとな
く夢の中にもただよひ來たれば、ふと昔の今に返り來ぬるがにおぼゆれども、それも束の
間にすぎねばはかなくあはれなることよなし。

そも夢といふもののさながら幽玄のさかひなるにてもあらぬは云ふもおろかなれども、
夢と幽玄と距れることさしも遠からずとせば、内親王の好み詠みたまひし夢の御歌におの
づと、幽玄のきざせることあるはげにことわりにもすぎたりとぞ云はまほしき。

式子内親王つねに昔を偲びつつ夢ぢ辿りしそのすゑに幽玄のつひのはてを究めたまひし
こと、まさに右のはかなくての一首によりてぞまがふかたなく知るをうべき。

式子内親王のいとも卓れたる御詠ほかにくさぐさあれど、それをこりなくここにけみせ
むことさらになしうべきにあらず。

さはいへど、ことにこの内親王の名に立てる

はかなくてすぎにしかたを數ふれば

花にももの思ふ春ぞへにける

の一首ばかり引かでやみなましかばいともかたほならまし。この御詠、百首歌の一首なること新古今集の詞書に記せるばかりにて、いついかなるをりに詠みたまひしや定かに知るまじけれども、そはいかにてもあれ、内親王の一期のつひのあはれもはかなきも、ただこの一首にこもりてあまりなしとおぼゆれば、やるかたなき思ひのうたたわが胸にもつのりきてせむすべなし。ただ一言かしこしとばかり言ひてやみなむにしかじかし。